



Title	ニュー・バウハウスの創設とシカゴのデザイン教育 : 渡米後のモホリ=ナギ
Author(s)	金, 相美
Citation	デザイン理論. 2013, 62, p. 106-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56380
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ニュー・バウハウスの創設とシカゴのデザイン教育

— 渡米後のモホリ＝ナギ —

金 相美／大阪産業大学

バウハウス (Bauhaus) は1919年、ドイツに設立された総合的造形教育機関で、造形の集大成である建築をもとに調和のとれた造形と美術への見直しを促した。1925年にドイツの不安定な政治や経済状況により廃校を余儀されるが、デッサウに移り授業を再開した。しかし1932年、ナチスにより解散を命じられ再びベルリンに移るが、わずか1年後の1933年に終焉を迎えた。当時は多くの知識人がナチスの弾圧を恐れヨーロッパからアメリカに渡っていった時期だった。バウハウスの元教師だったモホリ＝ナギ (Laszlo Moholy Nagy, 1895-1946) もシカゴ芸術産業協会の招聘を受け渡米した。そして協会の支援のもと1937年、シカゴにニュー・バウハウス (New Bauhaus) を開校させた。

ニュー・バウハウスはその名称からしても「ドイツのバウハウスの流れをくむ」デザイン学校であることがわかる。ニュー・バウハウスの誕生はごく単純に言えば、行き場を求めていたヨーロッパの知識人と、彼らの進んだデザイン教育とその経験を取り入れたいアメリカ側の利害が一致した結果に他ならない。しかしニュー・バウハウスの設立と運営、特にモホリ＝ナギの活動は異なる教育理念とシステムの移植について示唆するところが多い。本発表はイリノイ大学シカゴ校の特別コレクション (Institute of Design Collection) など、シカゴでの現地調査をもとにニュー・バウハウス設立前後の背景と運営実態について考察した。

1897年から1938年の間、シカゴでは「も

の」の質の改善を目的とする多くの団体が出現した。シカゴ・アーツ・アンド・クラフツ協会 (The Chicago Arts and Crafts Society, 1897-1912)、工業芸術連盟 (The Industrial Art League, 1899-1904)、シカゴ芸術産業協会 (The Association of Arts and Industries, 1922-1938) をもっとも重要な団体として上げられる。中でもシカゴ芸術産業協会はその規模と財政状況、影響力からしてより重要な団体であった。シカゴ芸術産業協会は展示会をはじめ、講演会やデザインコンペの開催など、さまざまな活動を行っていた。中でも特にデザイン教育の支援に力を注いだ。協会はシカゴ美術館附属美術大学 (The School of the Art Institute of Chicago) のデザイン教育に補助金を出していたが、両者の教育方針が合わず撤退してしまう。その後、補助金を出すだけでなく、直接運営に関わるデザイン学校の設立を試み、実現に至ったのが「ニュー・バウハウス」だった。しかし、協会がニュー・バウハウスに関わったのは1937年から1938年までのわずか一年足らずで、またこれが協会の最後の事業となった。協会はニュー・バウハウスの運営から退いたのち、解散した。ニュー・バウハウスが開校した年に発行された協会のカタログをみると幾つか興味深い点が浮かび上がる。協会は新しい時代を担うデザインとデザイン教育を望みながらも、それを実現できる立場、または姿勢であったのかについては疑問が残る。

バウハウスとアメリカとの接触は大きく二つの段階として区別できる。第一段階は1919年から1936年の間で、主に建築とバウハウス

の要人による思想の紹介を介した交流の時期。第二段階はそれ以後、ブラックマウンテン・カレッジのアルバース、ハーバード大学のグロピウス、ニュー・バウハウスのモホリ＝ナギらによる、アメリカでの直接的な教育活動が行われた時期である。第二段階、つまりモホリ＝ナギがアメリカでの直接的な教育活動を行うまで、ある程度の交流はあったものの、それは建築や芸術界の要人といった非常に限られた人たちであり、十分だったとは言い難い。ひいて言えば、シカゴ芸術産業協会の人たちはバウハウスとモホリ＝ナギの教育理念を十分に理解していなかったと言って過言ではない。

1946年、モホリ＝ナギは51歳の若さで急死してしまう。死因は白血病。亡くなる直前まで精力的に働いていたため、周囲の驚きは大きかった。モホリ＝ナギの後任が決まるまでネイサン・ラーナーが臨時ディレクターを務め、1947年3月にアイヴァン・チャマイエフが就任するが、結局1949年にイリノイ工科大学 (Illinois Institute of Technology) に吸収され一つの学部となる。

シカゴの産業界は「ものづくり」を支える教育を必要としていた。シカゴの産業界や有識者たちは1897年、イギリスのアーツ・アンド・クラフツ運動をモデルに「シカゴ・アーツ・アンド・クラフツ協会」を設立し、手造りと価格より質を重視する教育を行った。しかし、ソースティン・ヴェブレンも批判したように手造りの価値を過大評価し、新時代の生産体制には順応できなかった。続いて1899年には、オスカ・ローウェル・トリグスらが「工芸芸術連盟」を設け、アメリカ独自のインダストリアル・アート教育を試みようとした。彼らは工芸とデザインの両側面を意識しながら、機械生産をも許容した工芸と、工具

のレベルアップを図ろうとしたが、結果を残すことはできなかった。工芸芸術連盟の活動については研究が十分ではなく、その理由は不明である。シカゴ・アーツ・アンド・クラフツ協会が日本でいう「美術学校系」であったとすれば、工芸芸術連盟は「工業学校系」であったと言えるだろう。そして「シカゴ芸術産業協会」がドイツのバウハウスに注目し、誕生させたのがニュー・バウハウスであった。

シカゴ芸術産業協会とモホリ＝ナギとの初期の衝突が目立ったものの、このような歴史の中で俯瞰してみると、ニュー・バウハウスが「近現代美術的なデザイン教育」をアメリカに紹介した功績は大きい。言い換えれば、シカゴ・アーツ・アンド・クラフツ協会の美術学校と、工芸芸術連盟の工業学校を巧みに融合させたと言える。その後、ニュー・バウハウスの教育はイリノイ工科大学に引き継がれ「産業的」「経営的」「マネージメント的」要素をも加えたデザイン教育となっていく。グロピウスは、ニュー・バウハウスのイリノイ工科大学の統合記念式典において「私は、12年前ニュー・バウハウスと呼ばれていたこの学校にモホリ＝ナギを招くため尽力したことを誇りに思っています(…)彼が学校を開いた時、私たちはバウハウス運動が非常に異なるこの地で広がり、豊かになり、成長することを知っていました。そして、そのような異なる性格が絶えず変化する解釈を与えてくれることも。アメリカでの出発は大変なものでしたが、この国のバウハウス精神は、いまは国際的かつ伝統的なものとなりました」と演説を行った。シカゴ芸術産業協会とモホリ＝ナギの実験は未完に終わったが、以上のようにニュー・バウハウスの設立過程は教育思想の移植と実践、そしてデザイン教育における芸術と産業の関係について示唆するところが多く、再考に値する。